

純粹倫理のテキストである『万人幸福の葉』第十一条「万物生々」には、次のような文章があります。

「ほんとうに大切にすることは、むだに使わぬことであり、さらに金銭を生かして使うことであって、これがその頂上である」

お金を大切にすることとは「生かす（活かす）」ことであると示されています。

また、第十六条ではお金を大切にすることについて、次のように記されています。

「最も己を大切にすることは、自己の個性を、出来るだけのばして、世のため人のために働かすことである」

この場合は、「人」を指しています。対象が「物」やその象徴である「金銭」に対しても同様と見ることができるよう。

では「金銭の個性」とは何か。『お金のむこうに人がいる』の著者で、元ゴールドマン・サックス金利トレーダーの田内学氏は、著書の中で「お金の価値は、将来、誰かに働いてもらえること」と述べています。

お金を使う対象には商品やサービスがありますが、それらを分解すると原材料と労働（開発、生産、営業など）に分けられます。さらに、その原材料も提供した会社では、より自然に近い原材料と労働に分けられます。突き詰めて考えると、多くの階層が積み上がっていますが、最終的には金銭ではなく自然の産物と労働が残るのです。

このように考えると、より良いお金の使い方とは、それによって働く人が喜んで働



コロナ禍を超えた支援の継続から金銭のいかし方を学ぶ

けること、そしてその結果として生み出されるものが世の中をより良くする使い方と言えるでしょう。

▼

ガス販売の会社を経営するK氏は、あるプロデューサーから提案されたイルミネーションイベントの企画に共鳴し、協賛してきました。しかし、コロナ禍により多くの企業が協賛を辞退し、企画自体も開催が危ぶまれた年がありました。事情を知ったK氏は、自身の会社も決して楽ではなかったもののプロデューサーの志を応援するため、一層強力に支援することを決断しました。

K氏など多くの支援者のおかげで、そのイベントはこの年も開催され、コロナ禍を明るく照らしてくれたのです。

翻って見ると、経営上は意識する間もなく、支払いがあり、入金があります。しかし、一つひとつの取引の裏側には人の働きがあり、その働きによって生まれた価値があります。自分の支払いによって生まれた労働がより良いものか、またそれによって生まれたものがどれほど世の中にプラスに働いているのか、改めて考えたいものです。喜びを生み出す支払いは、思わぬ働きも生み出してくれるかもしれないのです。

イベントの開催にあたり、そのプロデューサーはK氏の支援の経緯を他の大型協賛企業に説明し、イベント全体のメイン会場の冠スポンサーとして打ち出しました。こうした支援はコロナ禍以降の現在においても継続しているのです。